

様のやうには行届きますまいけど、妾だつて女子大學で看護法の一班ぐらゐは研究してゐるわ。」

と、和歌子は打怨じ顔。

其處へ、横合から津根子が助太刀に出た。

「慎一郎や、和歌さんがこの様に御深切にしておくれなのぢやないか。それをお前は那樣不服顔して……まあ、何うしたものだえ？」

其れでも、慎一郎は強情に押黙つて、石のやうに固くなつてゐた。

津根子と和歌子とは顔を見合せた。果ては手の附け方無さに飽ねて、二人は悄悄と病間を出て行く。

慎一郎は獨になると、始めて悪熱も薄らぐ如く覺えて溜息を吐くのだ。と、何時の間にか、又しても和歌子が入つて来る。

慎一郎の面は不快の色に曇つた。

四二

「慎一さん、お目覺め？」

和歌子は病人の枕頭にベツタリ座つて、

「最うお薬を召上る時間よ。」

慎一郎は素氣無く頭を掉つた。

「時間が来れば自分で勝手に飲みます、關はず捨て、置いて下さい。」

「あれ、何故那樣……。」

と、怨み顔に、

「貴方は冷酷な事を仰有るのよ？ 妾、人手が足りないからつて、叔母様に頼まれ

て貴方の御看護に上つたんぢやありませんか。ねえ、ですから其意で使つて頂戴。」

「折角だがお断りする。」

慎一郎は益す冷かに、

「和歌子さん、御存知だらうが、病人と言ふものは我儘なものです。何うか、其の我儘を爲せて下さい。」

「え、多度爲さいまし。妾、貴方の御無理から、甚麽事で喜んで服従してよ。」

「では、赤坂へ歸つて貰ひ度い！」

和歌子はサツと顔色を變へた。

「慎一さん、貴方は……妾を。」

「僕は貴方の介抱を受け度くないのだ。斯うして貴方が傍に居ると、却つて病氣が重るばかりです……。」

如何に病人は我儘のものとは云へ、是では餘りに無法過ぎると、和歌子は慎一郎に取絶りながら、

「貴方は……妾が那樣に憎いんですか。那樣愛相盡しをされる覺えはありません。昔の許婚でゐた時分の事をお思ひなすつたら、義理にも那樣冷酷な事を仰有れない筈よ。」

「何をするんです！」

慎一郎は自己に絡はる女を突退けて、

「僕は最う口を利くのも苦痛だ。彼方へ……彼方へ行つて下さい。」

「否、妾は行きませぬ！」

和歌子は泣聲を上げた。

「貴方が無情な事を仰有るなら、妾は意地でも此處を動かないから、然う思つて下さい。」

「そ、それだ！ 其の強情が實に不快なのだ。和歌子さん、以前は如何なる關係があらうと、今日では既に没交渉です！ 殊に貴方のお父様と僕とは、或る意氣張づくから互に感情を害して居る。その令嬢の和歌子さんから、病氣の介抱を受ける覺

えが無い。」

「まあ。」

と呆れて、

「那樣事で妾をお嫌ひなさるのは御無理よ。慎一さん、能く考へても御覽なさい。妾ね、この三年と云ふものを、貴方の無情な爲めに何程苦しんだと思つて？ 那藝妓あがりの女になど見返られて、妾は失戀の淵に獨り泣き悲んで居たんですよ。それをお思ひなすつたら、少しは可憐な處女の爲に、同情の涙を濺いで下すつても可いでせう。」

「えゝ！ 最う何も聞く耳は持たん！ 僕は貴方のやうな新しい女は蟲が嗜かんだ。さあ、彼方へ行つて下さい。」

「然う云ふ失禮な事を仰有れば、妾、意地でもお傍に居るから然うお思ひなさい。貴方が何と不服をお唱へなすつても、妾は叔母様に頼まれて御介抱に參つたんです

から、其のお謝絶が無い中は一寸も動きませんよ。」

慎一郎は齒齧みした。是が満足な體であつたら、直ぐにも襟首を捉んで逐出すのだが、我と我身さへ自由にならぬ病中！ 憎き女と思ひながらも、其れさへ能きぬ不甲斐無さ。

「宜い！ 然う云ふ精神なら、何うでも隨意にしたら可からう！ 僕は一際口を利かんから……。」

和歌子は口惜涙に掻昏れながら、

「慎一さん、能くも妾を侮辱なすつてね。妾、叔母様に申上げてこの成敗を附けて頂きますよ。」

と、腰を浮かせ掛けた處へ、庭口から飄然と入り來つたのは西野憲策であつた。

「おや。」

和歌子は間の悪い形。

憲策の方でも一驚を吃した。

「何ぢや、お前は淺野のハイカラ令嬢でないか。」

四三

この家に和歌子が来て居るを見て、憲策は何となく勝手の違ふやうな氣持した。和歌子は和歌子で、未だ是から叔母を味方に引入れ、慎一郎を説落す意で居たが其處へ生好かない憲策が訪ね寄つたので、皮肉な罵聲を聞流しに、急いで叔母の居間へ逃込んでしまつた。

憲策は遠慮無く、病床に近いた。

「慎一郎、今日は甚麼病状が。」

慎一郎は叔父の來訪に、思はず喜びの眉を延べた。

「何うも思はしくありませんが……叔父様、能くお出で下すつた！ 僕は叔父様

のお見えなさるのを待つて居ました。」

「然うか、俺も二三日前から見舞旁た約束の土産話を持つて來る意ぢやつたが、種用事があつたで今日まで持ち越したのだ。」

叔父の言が、慎一郎は腑に落ちなかつた。彼は無言の儘、憲策を見上げた。

憲策の方ではまた然うとは思はなかつた。お紀久と約束した先日の土産話を、慎一郎も待兼ねて居る事と勘違し、

「まづ其話を爲る前に、是から見て貰はう。」

と、懷中から一通の證書を取出した。

慎一郎は何事かと、其れを抜き見たが、

「叔父様、是は紀久と其父との絶縁状で……。」

「然うぢや！ 彼の儀平の爲には、今日まで夫婦とも非常に苦しめられた。俺は其を見るに忍びず、又其處には聊か事情があつてな、養鶏事業の資金を擲ち、彼から

此の證書を買ふたんぢや。お前達も今日からは安心するが可いよ。」

「……叔父様、それは既に遅かつたです！」

「何ぢや？」

慎一郎はハラハラと落涙した。

「紀久は……紀久は……先日離別を致しました。」

「離別を？」

憲策は膝を立直した。

「ふむ、其れは事實か。」

「……紀久を離別せねばならぬ事情になつたのを、僕は良人として悲むのです。」

「其の事情と云ふを訊かせてくれ！」

と、憲策は屹となつた。

「お前が聞き度くば、妾から聞かせて上げますよ。」

——斯う次の間から呼懸けながら、姉の津根子が姿を現した。

「お、是れや姉様の畫策ですな。」

憲策は眺も裂けんばかりに姉を睨み据ゑた。

「憲策！ 他聞の悪い事をお言ひで無い。」

津根子は勝慢つたやうに言つて、

「先日、築土の八幡様で頼んだ事……彼件は最うお前の力を借らすとも濟みました。」

憲策の眼には悲憤の涙が溢れた。

「姉様、お紀久を離縁した理由を訊かう。」

「彼嫁は盗みをしました！ 他様のお金を盗んだのだよ。」

「満らぬ事を！ 彼嫁は那樣可怖き罪を犯す如き婦人では無い。」

「ほ、お前は彼嫁を大相御最負だねえ。あの様な優しい顔はして居るが、お紀久は

泥水あがりの女だけに、腹裡には可怖い隠謀を持つて居るのだよ。人もあらうに浅野様の紙入を盗むなどは、呆れ果てた悪女で無いかえ。」

「浅野の懐中物を……。」

憲策の頭脳には、蒲田の菖蒲園に於ける定輔と儀平の會合が閃いた。——彼は腕組した。

姉の津根子から、輪に輪を掛けた例の出来事を聞取ると、憲策は矢庭に起上がつた。而して、蹠々と縁を下りながら、

「慎一郎、心配するな、お紀久の身は叔父が引受けた。早晚、吉左右を報するで必ず落膽するには及ばん——お前はな、一日も一刻も早う壯健になつてくれ。」と、力強くも言放つた。

四四

西江戸川町の松永家を飛出した西野憲策は、川一つ越えた東五軒町の停留所から電車に乗つた。飯田町から九段の阪下を迂回して、兩國へ出るまでの可悶さは無かつた。彼は今日に限つて、電車の速度が遅く思はれて、心も狂しげに地踏んだ。兩國へ着くと、彼が人先に電車から飛降りた時、其の面筋を掠めるが如く驅抜けた俤——而も二臺續いて。

憲策はハツとして飛退きながら、

「こら！ 注意せんか。」

と、鬱抑紛れに一喝した。

其聲が餘り大きかつたので、俤上の客は齊く振返つた。

「おゝ！ 汝は浅野と儀平ぢやな。」

憲策は逐掛けながら、

「用がある！ 待てッ。」

定輔も驚いた。儀平も驚いた。此處で彼に捉まつては一大事とばかり、無暗に車夫を急立て、

「狂人だ！構はずと急いで遣れ。」

何事かと一端歩みを緩めた車夫は、定輔が呟附に、それ！と掛聲勇しく驅出した。

「こら、待てと云ふに待たんか。」

憲策は叫びながら追ひ絶らんとする時、生憎電車に道を遮ぎられた。

其れを遣過して驅出したが、其時は最う俾は何處ともなく影を隠した後である。憲策は無念の拳を振緊めて、

「えゝ！残念ぢや。」

と、徒らに焦燥る而已。

折しも、傍の小間物店から馳出したのは、下町風の仇ッばい婦人。

「若し！西野の叔父様ではございませんか。」

「誰ぢや？」

憲策は慌だしく振返つたが、

「やあ、貴方は……お紀久さん！」

「……はい、妾でございます。」

お紀久は静かに近寄つた。

憲策の眼には、お紀久の仇めかしい扮装が、如何ばかり驚異に映つたらう。

先日までの丸鬚姿は跡をも止めず、今日は髪さへ意氣な銀杏返し、華美な浴衣に

黒縹子と博多の晝夜帯——憲策は直呆れに呆れて、事情も無く其の仇姿を贖めた。

お紀久も我姿を見廻しながら、

「叔父様、妾のこの姿を御覧になりましたら、定めし御不審に思召しませう。」

「實に意外ぢや！」

憲策は嗟嘆した。

「何うしても、貴方とは思はれん喃。」

「御道理でございます……。」

お紀久は打沈んで、

「妾、叔父様に斯様な姿を御覧に入れますのが、何より辛いのでございますが、斯う致して暮さねばならぬやうな、儂い身の沈みました。」

「俺は夢のやうな気がしてならん！ 然うとは知らずに、貴方に逢ふて、種々話をせうと思ふて來たが、最う何事も言ふ必要はあるまい。お紀久さん、貴方は無事で暮すが可い。」

と言つて、其儘に別れ去らんとした。

「叔父様……。」

お紀久は追ひ絶つて、

「妾が斯う云ふ事になりましたには、是非聽いて頂かねばならない事情がございます。それに、叔父様も、故々妾をお訪ね下さつたと伺ひます。決してお手間は取らせませんから、何うぞ暫くお交際下さいまし。」

憲策も、此儘に別れ去るは忍びぬところである。

「宜い！ 訊かうよ。」

「では、鳥渡其處まで御一緒に……。」

「何有、其處の公園にベンチも有らう、青葉の蔭で涼みながら話すとせうよ。」

「戶外では何でございますから……。」

「可いから！ 彼處で澤山ちや。」

——二人に兩國公園内に立入つた。

四五

白晝の公園内には人影も杜絶えて居た。

青葉の木蔭涼しいベンチに、相對した憲策とお紀久とは、暫しの程は言葉も無くであつたが、

「さあ、お紀久さん、遠慮無く貴方の話と云ふて聽かせて貰ひ度いな。」

とお紀久は慎やかに、

「何からお話し申したら宜いでせう……妾は最う胸が一杯になつて。西野の叔父様、妾の此扮装を御覽になり、定めし御不審にも思召したでせうが、松永家を去られた紀久は、斯う致さねば世間を渡る事ができないのでございます。」

「或ひは然うかも知れぬが、僅か二三日の間、餘りに變化が早過るやうに思はる、

貴方を他人とは思はぬ西野憲策ちや、然うなる前に、何故、俺に一應相談してくれなんだかと、不快に感せぬ譯には行かぬて喃。」

「そのお怨言を受けますのは、妾、覺悟の前でございます！ ですけど、叔父様、妾は良人の爲めとは申せ、心にもない可怖い罪を犯しました。其罪を償ひます爲めには、否應無しに五百圓のお金を拵へねばなりません。女の身で即座に大金を拵へるには、何うしても元の藝妓になるより外に方法は……誰しも卑しい稼業が好きで身を落しません、是も定まる運命なら爲方が無からうと存じます。」

「其の金子と云ふは、淺野に返すものぢやらうな。」

「最う御存知なら隠し立ては致しません。實は先日叔父様からお預り申したお金を弗とした手違ひから親仁に奪られてしまひました。其跡へ彼の淺野が病氣見舞に参り、故意と紙入を取落して行き、其れを拾ひました妾は、落し主へ届けた上改めてお金を借りやうと思つて居るところへ、叔父様がお見えなすつたので、其お金をお

渡し申しました。唯今から想ひますと、妾が金に手を附けるやうにと、浅野と親仁が謀んだ仕事でございませうが、其畏に掛つたのは妾の落度と、誰を怨むにも當りませぬ。それが原因となつて、妾は到頭松永の家から去られました。」
「然うであつたか。」
と、憲策は嘆息を洩らした。

「其れとは知らずに、俺は貴方に預けて置いた金子を受取つた。其折ぢや、貴方が一言事情を打明けてくれたら、斯う總ての件が手違ひにならずとも済んだのぢや。お紀久さん、俺は養雞事業を起す爲に作つた金子を、貴方の父に欺き奪られたでよ。併し、其れも俺が不詮鑿の結果で、貴方と同じく、誰を怨むにも當らんのぢや。」
「叔父様には申譯がございませぬ。」
お紀久は面目無氣に差俯むいたまふ、

「親仁は全くの悪人でございませう！ ですが、妾の爲めには唯一人の親で……何

うかお赦し下さいますやうに。親仁の犯した罪は必ず妾がお辨償いたしますから。」
「否、否、其の斟酌は爲んでも、事、憎むべき儀平ではあるが、貴方の爲には唯一人の親でな。儀平も悪くはあるが、其れに上越して憎むべきは彼の浅野定輔ぢや！ 俺は彼の舊悪を握つて居るで、貴方の怨みだけでも、彼奴に復讐して遣らんで

はならん。」
「それは暫くお待ち下さいますやうに。」

お紀久は憲策の憤怒を抑へるやうにして、

「妾は浅野のお金を盗んだ事になつて居りますから、何うか其金を返すまでは、何事も知らぬ振を遊ばして……。」

憲策は頷いた。

「其れは道理ぢや。併し、貴方には金子の出来る當があるかな？」

「はい、今朝早く種々と奔走して、漸く手に入れる事ができました。」

と、お紀久は胸部を押へながら、
「それから、妾は叔父様に改めてお願ひ申したい事がございます。」

四六

「何か知らんが、他ならぬ貴方の頼みぢや、俺は喜んで聞かうよ。」
憲策は髯面を突出した。

お紀久は晴々しい笑顔を見せて、
「では、妾のお願ひを叶へて下さいませるか。」

憲策は頷いた。
それを見ると、お紀久は晝夜帯の間から、手帕に包んだ金包を取出した。

「此處にお金が二百圓ございます。何うぞ、是で良人を病院へ入れて下さいまし。」
憲策は目を睜つた。彼は金包に手出もなさず、女の面を瞞めたまゝ、

「おゝ！ お紀久さん、貴方は……去られた松永家を思ひ、慎一郎を忘れずに居つてくれるか。」

「……はい！ 妾は松永の家から去られました。けれど、妾が悲しい離別を受けましたのは、決して良人の本心からではございません。假にも他様の物を盗みした妻としての妾を、浅野への辯明、姑への義理で、心にもない離縁をした事は能うく解つて居ります！ 妾は良人から捨てられたのでは無く、世間と云ふものゝ爲に捨てられたのでございます。ですから、縦令離縁はされましても、妾が良人を思ふ情は少しも變りません。妾がお傍を離れて居りましたら、良人は何彼に就けて不使でございませう。肺炎と云ふ病氣は養生一つで癒るものと聞きますから、此お金で、一日も早く入院させて遣つて下さい。妾は日蔭の花の、この儘世に出る事は叶はずに朽ちてしまひましても、良人の病氣が癒れば、それが、それが、何よりの満足で……。」

と、お紀久の聲は、次第に打しめつた。

腕組したまふ、其の貞節高い言に耳を傾けて居た憲策は、ハタと小膝を打つた。

「お紀久さん！ 貴方の精神は能う解つた、實に貴方は美しい心掛ちや。宜い、其

金は預つて行き、貴方の望み通り、早速慎一郎を入院させるとせうよ。」

「えッ、妾の願ひを……。」

「確かに聞入れた！」

と、強く答へて、

「併し、お紀久さん、松永の一族が貴方から然う云ふ厚意を受けて、其儘に見過す譯には行かん。貴方の厚意に報ゆべく、必ず俺が責任を帯びて、早晚以前通り復籍するやうに盡力せうから、何うか其れを樂みにして居るが可い。」

「叔父様！」

お紀久は憲策の膝に取絶つた。

「叔父様、叔父様、妾は叔父様を神様のやうに思ひます……。」

「神にはならぬが、俺も人として踏むべき道だけは盡す意ぢや。」

と、重々しく言つたが、

「では、謹んで貴方の厚意を受ますぞ。」

「若し、お金が足りないやうでしたら、何時でも御遠慮なく仰有つて下さいまし。妾、如何様にもして調べますから……。」

お紀久は眞情籠めて言添へた。

憲策は女から金包を受取り、確かと内懐へ納めながら、

「貴方の眞情……其れを不心得な姉に知せて遣り度い。」

「否、お母様に決してお悪い事はございませぬ。昔な松永家を大事に思召すからで妾、尠しもお母様をお慰み申して居りませぬゆる、叔父様、何うか誤解なさいませんやうに。」

「可い、可い。何事も能う解つて居る。」

憲策は袴の塵を拂つてベンチを離れた。

「では、お紀久さん。今日は此儘別れるとせう。貴方も體を大切に、俺からの吉報を待ちなさい。」

「叔父様、何分宜しう……。」

と、叔父を見上げながら、

「良人の事は呉々も……お頼み申します。」

「萬事は俺が引受けた。」

旋て、憲策は立去つた。

それを見送るお紀久の目には、世にも嬉げに感謝の光が満ちた。

四七

お紀久が、以前の菊松葉の菊香と名乗つて、柳橋から二度の左袂を取つて出たのは、それから三日とは経たなかつた。

花ならば何？ 青柳の楚々たる風情は、披露目の其夜から、片時も落着く間もなき全盛、瀧飲のあばれ酒に、嫖客の荒膽を挫いたが、それがまた評判となつて流行こと夥しい。

柳風亭の裏二階、隅田川の河風爽かに、青簾を吹返す新座敷に、甘くもない酒を飲合つてゐる二人の客があつた。例の浅野定輔と宮地と云ふ三百代言だ。

女將のお妻は、最前から二階へ昇つたり降りたり、何やら忙さうに狼狽。

「おい！ お妻、何うした？ 未だ菊香は見えぬかい。」

と、定輔は待ちかねて悪催促。

「本當にお氣の毒様ですわねえ。最前からのべつに電話を掛けてるんですけど、未だ三絃が空かないんですつて……。」

「今更暢氣な辯解は困る！ 斯う云ふ番狂せが無いやうにと、昨日から打合せて置いたで無いか。」

と、御機嫌は一方ならず険い。

女將は益す狼狽して、

「何うも済みません。妾の方ぢや丁と見番に掛合つて置いたんですけど………本當に困りましたよ。最一度電話を掛けませう。」

「電話では要領を得んよ！ 早速菊松葉まで確かな者を使ひに遣つてくれ。今夜は唯藝妓を上げて陽氣に騒ぐのでは無い。それ、例の一件の解決を附けるんでな。」

「都合に依ると、明朝にも告訴する事に。」

と、宮地は三百句調で言添へた。

「えゝゝ！ 其事は當人も承知なんですから、何方にしても、最う逐付け見えませうが………直ぐに使は出させよう。」

女將が萬事飲込顔に、肥肉の腰を浮かせ掛けた處へ、楷子段の下から女中が、

「お上さん、菊香姐さんが………」

と山出の大聲で喚き立てた。

三人は顔を見合せた。

定輔が目授せに、女將は氣輕に起上つて、

「おや、紀久ちゃん、能くねえ——さあ、ズツと此方へ。」

菊香は手欄を便に、如何にも深酒をしたらしい足取で、蹠々と階子段を上つた。

「妻ちゃん！ 今晚は。遅くなつて済まなかつたわねえ、堪忍しておくれよ。」

「最う〜皆様がお待兼ね！ 大分御全盛と見えるのね。」

女將は人を反らさぬ輕口を叩く。

「はあ、お蔭様でねえ。」

お紀久の菊香は、故意と當付顔に、

「……………流行兒はこれだから蒼蠅いのさ。」

「まあ、可いから早く此方へ。」

「那樣に引張つておくれで無い。これだつて世帯崩しだよ。——折角のお召物が痛むぢやないか。」

と、素質なことを言つて笑ひ出した。

「ほ、右左く山の手の奥様出は野暮で話せないね。妻ちゃん、濟まないけど肩を借しておくれ、妾や馬鹿に酔つちやつたからね。」

「世話の焼ける藝妓様だよ。さあ、此方だよ。」

——女將は大骨折で菊香を座敷へ連込んだ。

菊香は酔眼に、デロリと一座を胸した。が、直ぐ元の酔態に返つて、

「おや、淺野の旦那に宮地さん——毎度御最氣に。」

と、其場へ膝を崩した。

定輔は、女の酔態を見遣つた。

「お紀久、大分上機嫌ぢやな。」

「え、お紀久は生れ替つたんですよ！三年前の、菊香にねえ。」

四八

鳥渡見た菊香は、如何にも酔つて居るやうだが、精神は毅然としたもので、敵に油断を見せるやうな女では無かつた。

斯うして、自分の面前へ並んでゐた二人の嫖客は、憎さも憎い仇敵である。

え、口を利くさへ穢れと思ふほどではあつたが、左にも右くにも聘ばれて見れば、先方はお客様で、此方はその御機嫌を取結ぶ藝妓である。——今は何事も堪へて、先方の切出し方で、臨機應變の所置を附けどころと、何處までを敵の裏かく酔ひしれた態度。

定輔は、女の様子を興し易しと見て取つたか、食卓に片腕突いたまゝ、その鼻先に杯を差付けた。

「かへり咲の祝ちや！早速一つ献かう。」

「まあ、お酌をさせて頂きますせう。」

菊香は銚子を執上げて、

「宮地さん、大相難かしいお面相ね。そんな可怖い眼色をなさると、氣の小さい女子は卒倒しますよ。」

と、憎まれ口を利きながら酌をする。

「はゝゝゝ。」

定輔は可笑くもない事に空々しく笑ひ出した。

「宮地君、先日の敵を取られましたな。」

「いや、これは大敗北！」

宮地は顔に似合の輕口を叩いた。

「菊香君、僕を怨むのはお門違ひだ。其處は宜くお手和かに願ひます。」

「ほゝ、那麼事で人様を怨むやうな野暮ぢやありませんよ。實を言ふと、最うく病人の亭主には飽きてた處ですからね。それを幸ひに、後足で砂のハイ左様ならと極め込みましたのさ。」

「是は中々話せる！」

定輔は笑壺に入れた。

「お互に滿らの事で唯合つても面白う無い。先日までの事はサラリと水に流して、改めて交際直すとせう。」

「本當に！それが宜うございますよ。」

今度は横合から女將までが隊を出した。

「ねえ、紀久ちゃん、妾はお前様の心底も大方は察しちや居るけど、長い物には捲

かれのが當世だよ。」

「何うも憚り様。」

菊香は軽く頭を下げた。

「妻ちゃん御心添へは身に沁みて嬉しく思ひます。」

「ぢや、妾の顔を立て、おくれかえし。」

女將は一膝前めて、

「淺野の旦那だつて、お前様が御意に召してゐるから、宮地さんを頼んで如彼云ふ古風な狂言も仕組んで御覧なすつたのさ。決して悪く思はないでおくれ。」

「悪く思つたところで、最う濟んぢやつた事は取返しが付かないやね。妾だつて些とは粹な味を噛つた覚えがあるから、満更事情の分らない意地は張らないよ。」

「大出来！ 大出来！」

女將は好い氣になつて嘸し立てた。

「ねえ、旦那、斯うお話が早く付けば、何より結構ぢやありませんか。」

「大きに喃。」

定輔は顔の紐を緩めて、

「さあ、菊香！ 仲直りの印ぢや。今度は清く受けてくれ。」

と、盃の雫を切つて突出す。

「どれ！ 僕が媒介の役廻りを。」

宮地も乗地になつて、銚子を取上げた。

菊香は急に開き直つた。兩手を端然と膝に揃へて、

「鳥渡！ 皆様、待つて下さいよ。」

と、チロリと一座を陶しながら、

「妾、其前にお話を附けて置かなくつちやならない事があります。」

「何ぢや？ 其れは。」

「淺野様、先日貴方からお預り申したお金の事。」
「那麼ものは何うでも可からう！ 今更擔出しては、お互の間が氣拙く成るばかりぢや。」

定輔は急しく手を振つた。

四九

「何だつて、陋しい事を言つておくれで無い！」
菊香は屹となつた。

「妾は斯う見えても菊松葉の菊香だよ。未だお前達から、謂れの無いお金を恵ん貰う道理はないんだ。」

定輔は愕然として、

「菊香、お前は未だ例の件を腹に持つて居るな。」

「當然さ！ 先刻から他が優しくしてれば好い氣になつて、勝手な熱を吐くにも程度があつたもんだ。」

と、罵倒一番、今度は女將のお妻を流眼に掛けながら、宮地の方へ膝を突付けた。
「其處の三百屋さん、先般は故々小石川まで来てくれて濟まなかつたね。妾やお前達のお蔭で、到頭松永から離縁をされてしまつたよ。彼時のお金は確に妾が盗んだんだ。——其盗んだものが罪か、盗まれるやうに仕掛けたものが罪か。其筋とかへ持出すとお言ひだつたね。さあ、今夜こそは彼時の解決を附けて貰はうよ。」
と、思ひ切つてズバリと言出した。

女將は菊香が酔つて居ると思つた。けれど、此儘では納まりが附かないので、慄て、二人の間に割込み、

「紀久ちゃん！ お前様は何を言ふんだよ。満らない事を………旦那の御機嫌を損じたら何うおしだえ？」

「喧しいよ！ 人間並の口をお聞でない。お前なんかはね、我家の親仁の鼻下の寸法でも計つてりや可いんだ。さあ、妾を何うとも勝手にしておくれ。彼の時のお紀久は弱い女だつたけど、離縁をされて斯う身を落せば、天下に可怖いものは何にも無い。——何處へでも、お前達の好きな處へ突出して貰はうぢやないかね。」

其の思切つた言草を、定輔は呆れて聞いて居たが、急に開き直つた。

「お紀久！ お前は、其れを本心で言出したのか。」

「お紀久？ 紀久とは何だい。」

今度は其方へ突掛つて出た。

「巫山戯た事を言つておくれでない。妾はお前達から呼捨てにされるやうな覺えは無い！ 何故、お紀久様と様付に呼ばないんだい。」

「は、素晴らしい氣焰ぢやな。お前は那麽事を言ふても、俺の面前には頭が上らぬ筈だ。おい、女賊のお紀久！ 俺は特に然う言ふ。其れが口惜くば、盗んだ五百圓

の金を返せ。」

「そればかりの端金を………餘り齋々お言ひでない。」

菊香は片膝立ちになつて、帯の間から、豫ねて用意の紙幣を拔出し、

「そら！ 彼の時お前が故意と置忘れて行つた五百圓………確かに返すから受取るが可いや。」

と、突然、定輔の横面目蒐けて叩き付けた。

「汝は………何をする？」

定輔は慌て、體を反したが、其れは間に合はず、肩先に當つて紙幣は散亂した。

宮地は躍り蒐つた。

「無禮な事をするなッ。」

「え、このお折介奴！ 洒落た真似をしやあがるな。」

菊香は宮地を突飛ばして置いて、櫛子段をバタ／＼と驅降りた。

——帳場では親仁の儀平。長火鉢の前へ陣取り、獨りでダビリダビリ冷酒を飲つて居たが、餘り二階が騒々しいので、何事かと立出でた出逢頭に、菊香と顔を合せた。

「お前は何處へ行くんだ？」

捉へやうとする袂の下を磨抜けて、菊香は素足のまゝ庭先へ飛降りた。

「お父様、當分お前にも逢はないよ。無事でお暮しな。」

五〇

和歌子の看護振は、何一つとして慎一郎の氣には入らなんだ。和歌子が病間に入込んで居る間は、慎一郎は一日に幾度となく差引く悪熱に苦しみながらも、壁傍に寝返りを打つたまゝ、強情に押黙つて居た。

それを、傍で見えて居る母親の心遣ひは一通りでは無い。

漸うの思ひで嫁を慮り出して終つたので、早速赤阪から和歌子を呼寄せ、茲で深切な看護振を見せたら、如何に和歌子嫌ひな慎一郎でも、何時かは其の深切に絆されて、互の間に妙な隔意も取れ去らう。其中には病氣も癒り、芽出度く床揚となつた處で、彼女を後妻に！と言出せば、義理でも頭は横に振れぬ道理と、津根子には全部献立てが出来ては居るのだが、さて、自分の一存のやうには折合が付き相にも無い。

和歌子の方でもまた考慮があつた。三年も以前から片思ひに戀し續けた慎一郎の傍へ行けるやうになつたのだから、此處は自分の深切振をタツブリ見せる處と、腕に燃を掛けて活躍する意であつたに、慎一郎は殆ど受付けてくれやうとも爲ないので何となく當が外れて落膽した。

僅に二三日看護したばかりで、最う飽きてしまつた。——小説で讀んだり、演劇で觀たりした時は、病人の枕頭で、若い美しい女が忠實しく看護してゐるのは、又

なくうら淋しくも艶であつたが、其れを實地に遣つて見ると、何等の詩的歎興も起らず、病人の寝汗や薬臭いのばかりが鼻に付いた。

其れでも、想ふ男が自分の働き振を感謝して呉れば、未だ聊かは辛抱の甲斐もあると云ふものだが、慎一郎は寧ろ煩がつて居る……煩さがるのは通り越して、自分を嫌ひに嫌ひ抜いて居るのだ。

氣凛とした男前の、萬事が青年紳士の摸範たるべき昔の慎一郎には、強か戀の焰を燃やして居たが、斯うして櫻れ果てた態を見ると、或る想像の爲めに欺かれたやうな心地がしてならなかつた。

和歌子は滿らな相に病室から茶の間へ引揚ると、其處では、薄暗い五燭燈の下で、獨り悄然と津根子が煙草を燻らせて居た。

陽氣な赤阪の邸に引替へて、何と云ふ淋しい家庭の光景であらう。我家を櫻の眞盛の春に譬ふれば、此處は風の吹きすさぶ枯野とも稱へやう。——和歌子は氣の無

い風で、叔母の前へ座つた。

「おや、和歌さんや、慎一郎は何うしましたえ。」

津根子は急に元氣らしく言掛けたが、何處となく淋しい黑影が附纏ふて居る。

「多分お就眼ていせうよ。」

和歌子は投出すやうに答へたが、荒れ果てた室内の態を見廻して、

「叔母様、お宅は毎でも妙に淋しいのねえ。」

「それでも、和歌さんが手助けに来ておくれなので、近頃は平素より賑かなのでねえ。」

「是で？」

と、妙に肩を窄めた。

「妾、這麼に陰氣では、屹度神經衰弱に罹つてよ。」

「何有、少し馴れて御覽、直き其れほどでも無くなるよ。」

と、津根子は宥め顔。

玄關の格子戸の鈴が鳴つた。

女中部屋から、下婢の驅出す音がしたが、旋て、此方へ引返して、

「御隠居様、赤阪の奥様がお越しでございます。」

と、取次ぐ。

「まあ、お母様が？」

今迄滅入込んで居た和歌子は急に噪ぎ出して、津根子と共に出迎へに立つ處へ、

靖子は心易立てに入つて来た。

「まあ、お靖さん、能うこそ。」

「毎度娘がお世話様に。」

靖子は持参の見舞品を出しながら言つた。

「最と早くお伺ひする筈でしたがね、良人が不在勝たものですから、何彼と用事は

かり立込んで……今日は慎一様の御病氣は甚麼模様かと、鳥渡、お見舞に参りましたよ。」

五

「それはお忙しい處を故々。」

津根子は頼母しげに切下髪を下げた。

「何うも恐入りましたね。」

靖子は帯の間から煙草入を抜出し、細い金煙管で白梅を煙らせながら、我娘の方へと目を遣つた。

「和歌さんや、お前、巧く慎一様の御看護が能きますかえ。」

「妾、駄目よ！」

と、和歌子は不平満々。

「甚麼に優くして上げたつて、此方の爲ることは何一つ償一さんのお氣に入らないから。」

「否、其れは斯うなのですよ。」

津根子は横合から隊を出した。

「彼俸は一體が我儘の性質ではありませんがね、病氣になつてからは其が一層嵩じて和歌子さんばかりで無く、親の妻さへ持餘す位……何有、昨夜から些と熱が出て平素にない不機嫌でしてね。」

「——でせうともさ！ 左右く、病人と云ふものは我儘勝ですから。」

靖子は呑飲顔に、

「其處は、和歌さんも辛抱の爲どころさ、其代り將來へ行つて樂みがあります。」

「何うだか、知れたものぢやないわ。」
と、和歌子は膨れ面した。

「おや、お前の我儘にも困つたものさ。」
と、苦笑ひして、

「那樣事をお言だと、折角叔母様が是まで心配して下さつたのが無駄になります。」
「でも、妾は償一さんに嫌はれてるんだから……駄目なのは知れてよ。」

和歌子の言には何となく奥歯に物が挟まつて居る。それが、津根子には氣が氣で無い。彼が大骨折つて嫁のお紀久を虐り出したのは、和歌子を後へ直さうが爲めばかりである。其れも和歌子が氣に入つては無い。段々に微祿して行く松永家、それを啖止めやうとするには、淺野家と普通りの親戚關係を結ばねばならぬ。——斯う云ふ考慮からした仕事だ。

其れが僅か二三日で、和歌子は厭氣が潮したらしい。此處で、彼女に愛想を盡かされて終ふやうなら、今迄の苦心も水の泡となつて終ふ。津根子は何うかして、其れを防がねばならぬ。と思へば氣が氣で無い。

和歌子は人前も遠慮無く生欠しながら、

「お母様、今夜は此處へ泊まつて行けて？」

「ほ、暢氣な事をお言ひでない。」

靖子は窘め顔に、

「此の二三日お父様は何處へ繁込んでか些ともお歸郎がないので、妾が一晩だつて家を明けられるものかね。」

「だつて、妾は淋しくて爲様が無いんですもの。」

「それは、何しろ御覽の通りな小人数ですからね。」

と、津根子は辯明がましく呟いた。

「淋しい位の方が却つて暢氣で結構。」

靖子は立續けに二三服して、

「赤坂のやうでも困りますよ。人数ばかりは多くつても、役に立つやうなものは稀

ですからね。」

津根子には、靖子の執成が嬉しかった。

お宅のやうな大家族では、上に立つ貴方の氣骨の折れ方は大變です。其處へ行くと、手前共などは最うく暢氣で。」

「和歌さんは騒々しい處から遁れたのだから、恰で避暑へでも来て居るやうだらうね。」

「這麼淋しい處で避暑するなら、些とは騒々しくても赤坂の方が可いわ。」

「だつて、お前は自分から望んで………餘り我儘をお言ひでは、叔母様のお心盡しが無になりますよ。」

和歌子は不平顔に口を噤んだ。

津根子も昵々して居るばかり。

其處へ、例の通り案内も無く、飄然と入つて來たのは西野憲策である。

彼はデロリと此場の光景を見廻しながら、
「は、今夜は貴婦人の相談會と見える喃。」

五二

思ひ掛けぬ邪魔漢が飛込んだものと、津根子が眉を顰めれば、靖子親娘も可厭な顔を背けた。

憲策は、遠慮も無く女連の仲間へ割込んだ。

「は、今夜はお家騒動の秘密會議と見えるな。餘り大きな面をして延張ると、何處ぞから鐵拳の制裁と云ふ奴が飛出さんとも限らんぞ。」

靖子は急に開き直つた。良人の定輔はこの男に對して、甚麼弱味を抑へられて居るか解らぬが、這麼無禮な事を云はれて、其儘に尻込をしてゐる理由が無い。

「西野さん！ 餘り失禮な事を仰有るな。お家騒動の、秘密會議のとは何事です？」

妾は慎一さんの御病氣見舞に參つたのですよ。」

「然うではあるまい。」

憲策は嵩にかゝつて愚弄した。

「小なりと雖も松永家ぢや。其の家庭の平和を攪亂せんとなしつゝあるは、汝達親子で無いか。姉を煽動して彼の貞操無二なるお紀久を虐り出させ、其の跡釜へ馬鹿娘の和歌子を嵌込、うと企て居るは何者か。我輩の眼が黒い中は、然う勝手な振舞はさせんぞ。」

「まあ、怪からん事を。」

靖子は嚇となつた。

「貴方には何う見えるか知れませんが、當人の前で馬鹿娘とは何事です？ 失禮な言には程度があります。」

「は、は、は、憤つたか、汝にも人間並に憤る能があらうとは思はんぢやつた。いや

感心なものだ。」

津根子は最う耐へ切れずなつた。

「憲策！失禮な事をお言ひでない。お前には用がないから歸つて貰ひませう。」

「姉様、貴方も然うぢや。」

憲策は津根子を見迎へて、

「如何に微祿しても松永家は槍一筋の家柄ぢや。禽獸にも均き浅野親子を出入させ、不名譽とは思ひなさらんか。」

靖子は承知が能きぬ。

「浅野の妻子を能く禽や獸に譬へて下さいました。西野さん、浅野の家内靖子がお禮を申します。成程、松永様の家柄は御大層なものでございませう。斯うして、貴方と膝組でお話申すのも恐多うございますからね、妾は娘を連てお暇申ませう。」

「まあ、お靖さんや。」

津根子は獨りハラ／＼しながら、

「弟奴は御酒を飲酔つて居りますで、何うぞお氣に掛けやうに……。」

「否、最う構つて下さるな。」

靖子は全然腹を立て、終ひ、

「浅野一家を禽獸に譬へられ、ば、其れ以上の恥辱めはありません！ 貴方にはお氣の毒ですがね、松永家の御親戚に西野さんのやうな方があつては、縦し、娘を慎さんと娶合せたところで、今後の將來が案じられますから、今までのお縁談は今夜限り無いものにして頂きませう。西野さん、妾の娘は如何に愚かしいものでも、両親が揃つてゐますから、屹度立派な處へ縁付けて御覽に入れませう。」

「然うぢや！それが可い。成上漢の女婿には、貧乏華族の二男ぐらゐが相慮だ。松永の慎一郎を女婿にしたでは、豚に眞珠を擲つての誹議を免かれんて。」

と、憲策は飽くまでも罵つて止まぬ。

靖子は火のやうになつて起上つた。

「さあ、和歌さんや、お前もお聞きな通りだから、最う死にかゝつた病人の事などは諦めておしまひ！ 而して、お母様と一緒に赤坂へお歸り。」

和歌子も、歸り風の立つて居る處である。一も二も無く母親の意見に従つた。

「此處に居るのは、最う一刻も可厭！ お母様、早く歸りませう。」

津根子は慌てゝ其れを引止んとしたが、靖子親娘は振切るやうにして立去つた。

五三

不平満々たる靖子親娘が、門口に待たせて置いて自働車に乗組み、松永家を跡に西江戸川橋に差懸つた時、橋袂で道を譲る一人の女が目に入つた。

葉櫻の梢を眞蒼に染め返した電燈の餘光を、肩から半面へ掛けて浴びた其女は、先日松永家を去られたお紀久で。

「呀、お母様……。」

和歌子が覺えず叫んだので、靖子も何事かと其方を見遣つたが、是は何とも口へは出さなんだ。

——自働車は、河岸の夜風を衝いて、直ぐに行過ぎてしまつた。それを見送つた

お紀久は、佗しい思に胸を抱緊めた。

彼女は、柳風亭の浅野定輔の座敷を通れ出ると、通り掛りの辻俤に飛び乗り、後髪を曳かるゝやうな思ひに此處まで來たのであつた。けれど、今では松永家とは何の關係もない悲い身の上である。

何う云ふ考慮で此處までは來たのが……其れはお紀久自身でも解らぬ。彼女は、無意識の中に、三年の間を住馴れた、西江戸川町近く辿り來たのだ。

今頃は自分の行方が解らぬので、定めし柳橋では騒いでゐやう！ とは思ひながら、此儘で引返す氣にもなれなかつた。

「——その後、良人の病氣は何うであらう？ 折角此家まで来たのだから、縦し、

表だつては訪ねられぬまでも、切めては蔭ながら様子だけは知りたいもの。」

と、彼女は橋を越えて、薄暗い夜の軒場傳ひに、密と松永の塀外に佇んだ。

家内には、人の話聲。

それを漏れ聴かうと、お紀久は扉に鉢を寄せたが、何うしても明瞭とは聴取れな

い。——彼心は心を焦燥しながら、蹙音を忍んで塀外を小迷ふ中に、弗と手に障れ

たのは切戸であつた。

心も空に其れを押すと、切戸は音をも立てずに庭内に啓らいた。

お紀久はふら〜と庭先へ踏入つた。

此處から病間の離座敷までは、僅かに五六歩の庭を隔てたばかり………お紀久は

窃と窓際に忍び寄つた。

窓外の竹雨三竿、夜風が涼しく吹き通ふ。

裡には燈火の影しめやかに、窓障子に墨繪の人影三つ。

其時、影法師の一つは徐ろに搖ぎ出でた。

「姉様、貴方は俺が淺野妻子を逐歸したを、非常に怨んで居られるやうぢやが、彼

件は聊か考慮あつて爲た事ですぞ。」

其聲の主は、確かに西野の叔父であつた。

次いで搖いだ切下髪は、姑の津根子。

「その考意と云ふは何う云ふ事かえ？ さあ、聽かせて貰ひませう。」

「まづ其前に是を御覽なさるが可い。」

——憲策は何物か取出した氣勢。

その時、他の瘦せた影は、風に揉まるゝ芭蕉葉のやうに戦いた。

「叔父様、この金は？」

あゝ、それは可憐い良人の聲！ お紀久は覺えず沓脱石に跪づいた。

「此處に金が二百圓有る！ 姉様、慎一郎、此金はお紀久からの頼まれものぢや。」
 「え？ 彼嫁から……それは、何、何う云ふ譯で？」
 と、津根子。

「能く聞きなさい！ 或る事情の下に涙を呑んで、松永家を離別されたお紀久は、
 今こそ他人の慎一郎ではあるが、一度は良人として傳いた厚情を忘れ得ず、其身を
 以前の濁江に沈め、然うして得た此金を以て、甥の病氣を癒さんとしつゝあるんぢ
 やー」

と、憲策の聲は曇つた。

窓外に立聴くお紀久の眼には、竹の夜露が一雫。

五四

憲策の聲には悲痛の音が籠つた。

「姉様、俺の物語を聴かれても、未だお紀久を可愛い嫁とは思はれんか。貴方は淺
 野の一族と氣脈を通じて、遂にはお紀久を虐り出されたが、其れは甚だ間違ふた心
 掛けですぞ。お紀久は、卑い藝妓あがりの女ではあるが、慎一郎が見込んで妻とし
 たわけあつて、其の心根は貴族の令嬢と云ふても恥しからん！ 俺は是までに、彼
 女の爲め陰になり陽になりして蔽ひはしたが、遂に貴方の爲めに松永家から離別さ
 る、事となつた。其の後妻に、淺野の娘を爲る意で居られたらうが、那麽馬鹿娘が
 猫ほどの役に立つと思はれてか。既に今夜の様子でも知れましたらう。和歌子は昔
 て慎一郎と許婚の間であつた。それが、お紀久の爲めに良人たる人を奪れてしま
 したので、其の怨みを晴す爲め、巧々と姉様に取り入つて、遂にはお紀久を虐り出さ
 せた。が、さて愈よ自分が松永家へ乗込み、病人の看護を身一つに引き受けて見る
 と、僅かの間に直ぐ飽きてしまふた。萬一、信實慎一郎を思ふ情があれば、俺が如
 何なる暴言を吐かうと、此家から一寸も動かぬ筈ぢや。其れを又好機會にして、母

親と共に得々として去つたではないですか。それに引き替へ、彼のお紀久は、姑の貴方に虐り立てられつゝも、慎一郎が疾ひ付いてより三箇月餘を、唯の一度不平や愚痴がましい態度を見せたことがありませんか。姉様が、何うかして放逐せんものと心掛けながら、三年越を無理窟の附けやうが無かつたでも、大方の様子は知れて居る筈ぢや。併し、氣の毒な事には、淺野の姦計に陥り、其れが動機となつて離別された。離別は受けながらも、猶且つ良人を思ふ情は變らず、斯して俺に金子を托した。この金で何うか慎一郎を病院に入れて呉れ、自分が傍に附て居らなんだら、姑も病人も何彼に就て定めし不自由勝であらう。遠く離れて居る身には、唯其れのみが心掛りであると泣いて居つた！ あゝ、其の涙！ 俺も男泣きに泣かされたが、姉様、貴方には其の涙の意味がお解りなさらんか。」

諄々として説出した一言一句、其れは血の塊であつた。涙の塊であつた。津根子も、鬼や蛇では無い。

其の美しい嫁の眞情には、何として感動せず居られうか。彼女が舍弟憲策の面前に兩手を突いた。

「憲策！ 今迄の事は悉皆妾の心得違ひでした！ 何うか、赦しておくれ。」

「では、姉さんは……お紀久を可憐んで下さるか。」

「妾には今夜始めて、嫁の眞情が身に沁みて解りました。——慎一郎、お前に對しても申譯が無い。今までの母の罪は水に流して……あゝ！ それにしても一端縁をしては、最う呼戻す事も……能きなくなりました。」

——其嫁は此處に。と、窓外のお紀久は胸一杯になつたまゝ聲を忍んで泣いた。

「然し、姉様。」

「憲策は重々しく、

「今、お紀久は少なからぬ借金の重荷を背負ふて居る。其の解決を附けぬ内は、如何な事があらうとも連戻す事は能きんぢや。——俺にも聊か考慮があるで、此處

暫時は淋しくとも辛抱して頂かねばならん！ 大宮には俺の舊知己が居るで、其處へ行つて事情を打明け頼んだら、必ずお紀久を連戻る位な金は出来やうで喃」
これまで聴けば、最う澤山である。お紀久は涙の眼を上げて、窓障子に寫出された三つの影を伏拜み、以前の切戸から塀外へと引返した。
空には二十日を過ぎた月の影、見返る家は薄墨に閉ぢられた。其處には、戀しき良人や、可懐き姑や、情深い叔父が居ますかと思へば、お紀久は唯事情もなく胸が迫つて、再び跪いて伏拜んだ。

五五

この五日餘りを例の柳風亭で菊香を揚げ詰にして、全盛を極めて居る客があつた其人は竹中と云つて、自ら名乗るところでは、京橋の或る會社の庶務課長とか。近頃の客が、藝妓遊びの目的は、意氣な三味線の音締や、滅び行く江戸唄の趣味

を解さうとするのでは無くて、何れも或る野心を遂げやうが爲めた。然う云ふ客が多い中に、この竹中ばかりは、不思議なほど厭味が無くて、器用な遊興振をする。金放れも満更では無かつた。
菊香は、その清爽したのが寧ろ不思議なやうにも思はれた。
悪口説でもする客なら、巫山戯た真似をおしでないよ！ と、横面の一つも極付けて、あばよと逃げを打つ手段もあるが、厭味抜きの友達交際に出て居るから、菊香は不思議に思ひつゝも、氣持よく調子を合せて居た。
一座の藝妓は、小春に歌榮と壽々女、それが皆な誤親類筋でも無く、女將のお妻も雜つて、唯、面白可笑く騒ぎ立てるばかり。
「ねえ旦那。菊香さんも然う申して居りましたがね、貴方は本當に不思議な方よ。」
「は、何が不思議かい。」
竹中は床柱へ凭れて、鼻下の髯を捻りながら、

「だつて、然うぢやありませんか。」

小春は歌榮と顔を見合せながら、

「柳橋だつて、貴方の御意に召すやうな女が一人や二人は居りますよ。」

「是は驚いた。押掛け女房の推選は驚いたね。だが、僕は寔に女が嫌ひで、我ながら堅物には呆れて居るよ。」

「ぢや、何處ぞに二世も三世も——と云ふ粹な方があるんでせう。」

と、今度は壽々女が口を挟む。

「其れが有るくらゐなら、這處處に間誤付いては居らんさ。」

と、竹中は唯ニヤ〜。

「おや、這處處とは恐入りましたね。」

横台から女將が空々しく笑ひ掛けた。

竹中は例のニヤ〜を續けて、

「これは飛んだ粗相を申上げたね、其の罰杯に一つ行かうか。」
と、盃の水を切る。

「妾は最う澤山！ 此座では紀久ちゃん酒豪なんですよ。お杯はどうか其方へ。」

「此奴は振られ杯か、縁起は悪くとも清く受けて貰ひ度いね。」

「え〜！ 頂きませう。」

菊香は器用に受けて、

「妾、失禮な事を申すやうですが、何うしても解りませんよ。」

と、始めて口を切つた。

「何だい？ 解らないとは。」

「旦那の御身分が……。」

「那樣お調は何うでは可いちやないか。俺がお客でお前が藝妓さ。其れだけ解つて
ゐれば結構だ。」

「でも、何だか心配になりますもの。」

「心配に？ お前も神経質な女だな。」

竹中は面白相に笑つた。

「併し、俺の方ではお前の前身を能く知つてるぜ。」

「ほ、御冗談ばかり。」

と、菊香は取合ぬ。

「冗談にされちや氣が悪い。おい、菊香、お前は一度亭主を持つた事があるだらう

——或る銀行員で、松永慎一郎と云ふものを。」

菊香は愕然とした。

「え？ 何うして其を……貴方は、若しや淺野様のお知合では？」

「淺野？ 聞いた事が無い名だな。」

竹中は苦も無く言消したが、菊香の胸には怪い響きが残つた。

其時、竹中は不意に思ひ出したやうに言つた。

「お、俺は明日社用で大宮まで出掛けなくつちやならん！ 何うだ？ お前達も

螢見物旁た一緒に行く氣はないか。」

「賛成！ 何より結構。紀久ちやん、お前様も是非お供をおしだらうね。」

と、女將は透かさず言つた。

菊香にはそれを断る事が能きなかつた。而して、この次の間に淺野定輔が父親の

儀平と様子を窮つてゐやうとは、元より知らなんだ。

五六

大宮の氷川神社は、武藏第一の大社である。賽路十八丁、境内ひろく木立繁つて
鯉多き御手洗池の橋を渡れば、後方に林樹をひかへていと爽々しく、丹碧の飾もな
い御社の様は、何事のお在しますかは知らねども、恭なさに涙こぼるゝ心地がする

のだ。

其處から、右手に行くと、廣々として丘陵續きで、三方には青田をひかへ、松の縁に櫻若葉、茲に閑静な鑛泉宿が三四軒。

其の鑛泉宿の一つ、大宮館の奥座敷に陣取り、午後から酒を始めて居るのは、今日東京から螢見物に見えた五人連の一座であつた。

男は例の竹中で、跡の女四人は、宰領のお妻を筆頭に、菊松葉の菊香と、小春と壽々女。

「さあ、今日は一切親類交際の無禮講だ。未だ螢見物までには大分間もあるから、夕方までは大いに飲むべしだ。」

「へえ！ 旦那のお聲掛りが無くとも委細承知。紀久ちゃん、お前様もその意で、些と酔つた處を見せておくれよ。」

「え、妾は何だか……。」

菊香は妙に沈んで氣の無い面色。

「何を那樣に悄氣てゐるのさ。東京へ置いて來た松永様の病氣が氣におなりかえ。」
女將は客の面前も構はず諷刺つた。

菊香は憤然として、

「妻ちゃん、お客様の前で満らない事を言つておくれで無い。斯う見えても、妾や餘り未練氣の無い方だからねえ。」

「ほ、何うだか知れたもんぢやないよ！ お前さんは、御亭主孝行で評判だつたから。」

「勝手な熱を吐いたが可いや。」

此方は捨鉢に出て、

「然う云ふ事なら、今日は思ひ切つて酔つて見せるよ！ さあ、小春さんも壽々ちゃんもお酌をしておくれ。」

と、突然、盃洗の水をザブリと明けた。

それから、菊香はお銚子の七八本も薙倒した。電燈が點火つた時分には、最う獨りで身動きも能きぬほど酔ひしれた。

竹中と女將とは、最初から氣脈を通じてゐたらしく、旋て、時計が九時を報つのを待つて、

「やあ、遅々螢の見頃になつたぞ。直ぐに出掛けやう。」

「はあ、速ぐお供を申しませう。」

女將は菊香を促し顔に、

「鳥渡、お前様は何うしたの？ 口ほどでも無いぢやないか、其ればかりのお酒に酔つてさ、早く旦那のお供をおしなねえ。」

「だつて、姐さんは大相酔つてるやうですから、妾達だけがお供申して……。」と、小春と壽々女は取なし顔。

女將は怖い顔した。

「お前さん達は黙つてお在で。旦那は是非紀久ちゃんのお供がお望みなんだから。」菊香は、足取危くふら〜と起上つた。

「あゝ、行くとも！ 行かなくつて何うするものかね。」

「然うとも！ 誰だと思ふ？ 憚りながら柳橋の菊香姐さんぢやないか。——と來るとこだから。」

女將は無理遣りに菊香を引立た。

宿の庭前から外へ出ると、其處が直ぐに公園地。

公園は凡そ二萬坪、樹木疎らに、折から宵暗の空暗く、四邊は森として、夜の冷たい空氣が一面に行き渡つて、池畔から氣迂い蛙の聲が絶えては續き、續いては絶えたり耳に就く。

涼しい夜風に當ると、菊香の酔は一時に醒めた。而して、何となく身の引緊まる

のを覺えたが、人前だけは飽くまでも酔ふた風をしてゐた。
弗と面前を掠め去る一點の流螢、影を曳いて青し。

五七

調で、
菊香は我が目前を掠め去つた螢の行方を見送りながら、さも酔つて居るらしい語

「何だねえ、妻ちゃん、此處は螢の名所だと云ふけど、稀に二つか三つちや、態々
來て見る價値は無いぢやないか。」

「それがさ、是れから最う少し奥へ行くと、吃驚するほど澤山居るよ。ねえ、旦那
然うでせう？」

と、女將は聲を掛けた。

竹中は小春と壽々女を引連れ、何か尋ね物でもするやうに、暗中に眼をキョロ付

かせながら、一歩先に歩みを運んでゐたが、

「然うさ。旋て最う見えなくては爲らん時刻だ。」

菊香は聞答めて、

「誰か待合せていも被入るの？」

「何有、最少し先方へ行つたら、螢が居さうだと言ふのだ。」

竹中は慌て、斯う言ひ直した。

菊香の眉根は深い愁雲に閉られた。

それを、女將は背後から急付くやうにして、

「絶久ちゃん、何を茫然爲てるのさ、お前様は酔つて、苦しいのかい。其なら今に
介抱の仕手が澤山出来るよ。」

と嘲笑ふ。

「彈り様。」

と、此方も嘲み返した。

「その御深切には及ばないよ。妾だつて自分の身始末ぐらゐは能きますからね。」

「ぢや、匆々と行かうよ。」

旋て、公園を出外れると、前方は限も無き青田續きで、夜風に戦ぐ稻穂の中から迷ひ出て、中空に縋れ飛ぶ螢の數々は、恰も星の亂るゝやう。

「おや、螢が大相出盛つたこと。」

菊香は暫し見惚れて居たが、弗と心注いで、

「竹中の旦那は何處へ被入て？」

傍のお妻を顧へつた。

女將は妙に落着き拂つて、

「旦那はね、最う疾うに宿へお戻りなすつたよ。」

「冗談は廢しておくれ。今し方漸く此處へ着たばかりぢやないか。」

と、菊香は不審顔

「たつて、竹中さんは最うお役目が濟んだのだから、勝手に引取りさ。戀には戀じ同伴は邪魔——媒介は宵の口と極つてらあねえ。」

「え？ 何だつて。」

「紀久ちやん、お前は彼の竹中さんを何だと思つてお在でかえ。」

「近頃御最氣になつたんだから、何う云ふ方が能くは知らないけど、確か京橋の方面の會社へお勤めなさると伺ひましたよ。」

「ほ、お前様も好い氣なものさね。」

女將は憎い程落着き拂つて、

「それは些の出鱈目さ。實はね、彼方はお前様を此處まで連出す役目を振付けられた、淺野の旦那の手先なんだよ。」

さては！ と、菊香は屹となつた。

「實を言ふとね、妾も大方那樣事だらうと察してたのさ。妻ちゃん、本當にお前も友達甲斐がない。と、本来なら愚痴の一つも並べるところだけど……今更那樣事を言出したつて始まらない。妾は此儘御免を被るから、後刻で淺野の人非人が見えたら、お紀久が宜くとお傳言を願ひませう。」

其儘行過ぎんとする菊香の袂を、女將は捉へて離さず、

「お待ち！ お前様は此儘歸る意かえ。」

「當然さ。用の無い處に彷徨てた處で仕方が無い。」

捉られた袂を振切つて、菊香が今しも此場を立去らんとする面前へ、何處からともなく挺然と立現はれたのは淺野定輔。

「お紀久、今更逃げやうとするは見苦しいぞ。」

菊香は、夜風に髪の後毛を靡かせつゝ、夜目ながらも屹度定輔を睨んだ。

五八

定輔は、悪魔のやうな形相凄まじく、

「お紀久、この間は能くも俺に恥辱を搔かせてくれたな。今夜は其の返禮をする爲め、態々此處までお前を誘出したんぢや！ は、少しばかり驚いたらうな。」

「否、些も。」

菊香は覺悟を極めた。

「何うもあの竹中と云ふお客は、腑に落ちない處があると思ひ、此方でも其れとなぐ様子を探つてた矢先なのさ。這樣書捨ての狂言で此處まで連出したのは大手柄！ それで、お前達は妾を何うする意なのさ。」

「聞くがものは有るまい。淺野の旦那が御深切は、滿更お前様だつて解らない事はなからうしね。」

女將は助太刀の格で、

「今夜は此處で膝詰談判！ 紀久ちやんの確りした了簡を聞かせて貰ひ度んだよ。」

「ほ、大相粹狂な人達だね。些と眼を開いて御覽な、世間は思つたより廣いよ。」

ねえ、何も妾ばかりが女性と云ふ譯ぢや無し、お金さへ持つて行けば、何處の花柳

界にだつて隨意にある奇麗首がウヨウヨ居まさあね。未だお前達にや、菊香姐さん

は齒に立たないよ。」

「え、利いた風な文句を並べるな。」

定輔は女の手首を握つて、

「幾程汝が楯を突いたところで、俺は儀平に金を捉まさせてあるぞ。」

「巫山戯な真似をおしで無い！」

菊香は捉られた手を振拂つて、

「それは大變なお門違ひ！ 金縛りにしたのはお父様で、妾は元より氣儘な躰さ。」

その妾に惚れて貰はうと思つたら生れ變つて來るが好い！ 幾程、時節が悪くなつても、未だ柳橋藝妓にや張も意氣地も残つて居らあね。利いた風な真似をおしで無い。」

女將は匙を投げた。

「旦那！ 最う駄目。這樣話の解らない妓には、口が酢ばくなるほど言聞かせた處

で糠に釘！ 好い加減に………何した方が早手廻ですよ。」

「溫和しう話が附くならば——と其れを望んで居たが、斯うなつては手荒な行爲も

せんぢやならん。」

定輔は女の肩先を引捉んで、

「お紀久！ 俺と一緒にい。」

「畜生！ 何をするんだい。」

菊香は最う捨鉢だ。突然、定輔の横面を毆飛した。

不意の一撃に、
「呀。」

——と叫んで、定輔は思はず踏めく。

それを、最一突飛ばして置いて、菊香はバラバラと驅出した。折しも傍の木蔭から躍出し、其の行手へ立開かつた親仁の儀平。

「やい！ 手前は……動く事は爲らねえぞ。」

菊香の眼からは、悲憤の涙が迸つた。

「お父様、お前は悪魔の加擔人をするのかえ。」

「洒落臭え譚語を吐かすな。手前よりは浅野の旦那が大事だ。」

「何とでも勝手にするが可いや、妾や妾だ！ 邪魔をせずと其處を退いておくれ。」

親仁を突退けて、菊香が猶も遁れんとするを、儀平は荒鷲の羽搏き、小雀の如く其場へ捻伏せた。

其處へ、定輔と女將が逐ひ絶つた。

「旦那！ 到頭雀は網に罹りましたせ。」

「何うも御苦勞だつた。案外手剛いには驚いた。」

「驚くのは其位にして、邪魔が這入らねえ中に。」

「萬事は頼む。中々俺の手には合はぬ代物だ。」

「宜うがすとも。さあ、お紀久、お父様と一緒に優しく行くんだ。」

儀平は菊香を引立てんとしたが……突如として起つた不思議な怪力は、反對に其腕を捻上げた。

「結構ぢや！ 何處へなと、其方の都合の好い場所へ供をせうよ。」

五九

是れぞ青天の霹靂！ 儀平は顔へ上つた。

「やい！ 痛え、手前は何者だ。」

折からの暗は濃い。儀平が悲鳴の原因は、定輔にも女將にも解らなかつた。

「儀平、何うしたな？」

「何うしたも斯うしたも……。」

儀平は懸命になつて、不思議な怪力から逃れやうと焦つたが、嘉納流の極意で緊付けられた襟首は、今にも零碎るゝばかり。

「はッはッはッ、蛆蟲奴！ 動くな。」

と、彼の怪力は一喝した。

定輔も女將も面喰つた。

「汝達は我輩を何者と思ふ？ この聲を忘れたか、西野憲策ぢや。」

あゝ、憲策は何うして此處へ立現れたらう？ 未だ現世には神も佛も在つた。お紀久の菊香は、不思議にもこの場の危難から逃るゝ事ができた。

怪力の主が憲策と知ると、儀平は最う反抗する力も抜け果てた。

「あッ、苦、苦しい。俺は死、死に相だ。」

「死に度くば勝手に死ね！」

憲策は獅子吼の一喝を成して、儀平を足許へ叩き附けたが、其の猿臂は電光の如く延びて、未だ其處に狼狽してゐた定輔の胸元を掴んだ。

「こら、浅野！ 今夜の主謀者は汝ぢやな。」

定輔は飛退かんとしたが、最う遅い。不甲斐無くも憲策の手許へ引着けられた。

「何、何うぞお手柔らかに……。」

「静かにせい！ 何をバタ／＼騒ぐか。浅野、汝は未だ悪事が廢まん。今から思へば既に十年以前ぢや。我輩が陸軍省に勤務中、汝は御用商人となつて入込み、殆ど詐欺に均さ不正手段を働き、其が爲め一再ならず縲紲の恥辱を受くべき處を、我輩の慈悲に依つて僅かに免れ、遂には今日の致富を爲したのではないか。然るに今

猶其惡心が直らず居るな。」

「……………恐入りました。」

定輔は苦し相な血聲を絞つた。

「手前の不心得から飛んだ御厄介を相掛けまして……………」

「今夜限り改心すると云ふか。」

「何事も手前の罪でございませう。お紀久は手前が落籍し、改めて松永家へ嫁入りさせますので、其れを持ちまして何うか今日までの罪は平に御勘辨を……………」

「必ず改心するとあらば赦しても呉れる！ 然し、お紀久は汝の世話にならん。如何に微祿しても西野憲策ぢや。お紀久を落籍する金は此處に持つて居る！ また儀平も然うぢや。先日、我輩が五百圓の金子を以て、親子の縁は切つた筈、今後は断じて手出は爲らん。萬一、不服があらば此場で言へ。」

儀平は縮み上つて、

「……………決して不服はございませぬ。」

「可！ 然うと解決が附けば何れも赦して遣る。勿々と立去れ。」

如何に無念でも殘念でも、憲策に遭つては定輔も儀平も齒が立たぬ。

何はさて生命あつての物種と、彼等は憲策の可怖い權幕に、其場へ早腰を脱かして居た女將を引立て、逃ぐるが如く引取らんとするを、

「待て、待て。」

憲策は横柄に呼止め、

「俺が此處へ來懸るを、途中で怪げな奴が二人ばかり啖止めやうとしたで、道傍の立木に縛付けて置いた。汝達の仲間ぢやつたら連れて行けよ。」

それは、彼の竹中と宮地である。何うして、此處へ驅着けなかつたかと云ふ原因は、其の一言で明瞭になつた。

「へえ、それは御丁寧……………」

「何ぢや？」

「否、此方の事で。」

——三人は暗に紛れて狐鼠々と消失せた。

「はッはッはッ、馬鹿な奴等ぢや。」

と、憲策は呵々一笑。

最前からの騒動中、木蔭に體を秘めて居た菊香は、漸く立出でた。

「叔父様、飛んだお世話様になりました。」

「お紀久さん、定めし貴方は驚かれたらう、好い折に來合せて何よりぢやつた。」

「危い處を通れましたも、皆叔父様のお盡力でございます……其れにしても、何

うして此地へ？」

「實はな、貴方を以前通り松永家へ納めやうと思ひ、この大宮在に住居しとる舊友

を尋ね、漸う思ひ通りの金子を整へての戻道であつた。喃、お紀久さん、貴方は今

夜から自由な體ぢや。」

「……叔父様、この御恩は。」

菊香は最う口が利かれなんだ。

水暗き所、螢火頻りに亂れ飛ぶ。

六〇

去りし妻の情は厚かつた。

西野の叔父より手渡された金子に依つて、其の翌朝、松永慎一郎は大學病院へ入

院した。

今日が一週間目である。さしもの難症も人の情の深きには打勝ち得ず、恰も薄紙

を剝ぐが如く、病氣は日に日に輕快に越いた。

今朝から慎一郎は、獨身で病床の上にて起返る事が能きるやうになつた。

彼の病氣は櫻花の咲く頃から始まり、その花が散つて、薄緑の若葉が梢を飾る頃が最も重態であつたが、今では不安な時も越えた。この調子では、最う退院にも間があるまい。

慎一郎は、病室の窓越に、庭の縁樹を眺めて居たが、弗と氣を替へて母の方を顧みた。

「お母様！ 彼の陽の光を御覧なさい。最う全然夏の色になりましたね。僕の病氣も此儘で長延くやうだつたら、この暑熱を到底無難に越すことは覺束ないと思つたが、最う其の杞憂も無くなりました。」

「眞實にねえ。」

津根子は涎を言つた。

「これも皆な彼嫁の情だよ。それを、妾は無理に逐出してしまひ、お前や憲策に合はせる顔もありません。」

「過去つた事はお言ひなさるな、紀久は決して姑や良人を捨てはせんです。何分、現今は借金と云ふ重荷を背はされて居るので、彼妻も自己の随意にならぬ身ではあるが、僕が以前の健康になれば、何うとも金の奔走し、直ぐにも連戻る事にしませう、其れまではお互に辛抱せんではならん。」

「然うなつたら、甚麼に嬉しいだらうね、妾も全然心を入替へたから、今度は彼嫁を大事にしますよ。」

「……あゝ！ お母様のそのお優しい言を、紀久が聞いたなら何程喜ぶだらう？ 紀久は嬉し泣きに泣くでせう。」

と、慎一郎は瞬きした。

津根子は、袖に涙を押へながら、

「慎一郎や、是迄の妾は可怖い鬼でした！ 彼れほど大事にしてくれた嫁が、何うして如彼も憎かつたらうね。」

「何有、お母様の罪ぢや無い、淺野一族と云ふ悪魔に魅されて居たのです。」

「全くそれに違ひ無い。今から考へると、妾は彼のお婿さんが憎らしい。」

「他を怨むには當りません。悪人の末路は大抵極つてゐる！何時までも淺野が全盛では居らんでせう。」

「然うか不知？」

津根子は小首を傾げつゝ、

「昨日、些と他家から聞いたがね、あの和歌子が去る華族からお婿を取るさうな。」

「は、何れ長持はしますまい。」

と、慎一郎は嘲笑つた。

——扉がコトリと鳴つた。

親子は話を廢めて、其方を振り返ると、西野憲策が入つて來た。

「叔父様。」

「慎一郎、其後は甚様模様か。」

「お蔭で追々にね。」

津根子は我子に代つて答へ、

「この二三日お見えでなかつたが、お前は何處ぞへ行つてお在でかえ。」

「先夜も些とお話し申したが、大宮在に居る舊友を尋ねたぞ。」

と、憲策は満面に笑を湛えつゝ言つた。

「それで今日は好い家苞を持ち歸つたぞ。」

「何だらうね？」

津根子には實弟の言葉の意味が飲込めなんだ。

「慎一郎も喜べ！今、其の家苞を披露する。」

憲憲は扉の方へ向つて手招いた。

其處には美しい女の影。

「おゝ！紀久。」

「……良人！」

お紀久は、矢庭に良人の膝に取籠つた。而して、嬉し泣きに泣いた。津根子は憲策と顔を見合せた。この姉弟の眼にも喜悅の涙が光つた。

かげひなた 終

大正三年一月二日印刷
大正三年一月七日發行

【定價金四十五錢】
【郵税金六錢】

著作
所有
(たなひげか)

著者 北 島 春 石

發行者 湯 淺 糸 策
東京市日本橋區若松町四番地

印刷者 菅 井 十 郎
東京市神田區松住町五番地

印刷所 碓 文 社
東京市神田區松住町五番地

發行所

東京市日本橋區若松町四番地
春 江 堂 書 店

(電話渡花四八六二 振替東京一八〇六)

MADE IN JAPAN

大畑匡山述
唐詩選講義
定價金參拾錢
郵税金四錢

十返舎一九著
栗毛
定價金廿五錢
郵税金四錢

狂花園哲麻著
會呂利頓智笑談
定價金參拾錢
郵税金四錢

鐵山禪師著
一休頓智笑談
定價金參拾錢
郵税金四錢

十返舎一九著
栗毛
定價金廿五錢
郵税金四錢

浮世の如き美人喜美子
どうせ浮世は儘ならぬ
浮世の如き美人喜美子
どうせ浮世は儘ならぬ
浮世の如き美人喜美子
どうせ浮世は儘ならぬ

棟梁老人著
蜀山人頓智笑談
定價金參拾錢
郵税金四錢

木曾 栗毛
定價金廿五錢
郵税金四錢

狂花園哲麻著
會呂利頓智笑談
定價金參拾錢
郵税金四錢

鐵山禪師著
一休頓智笑談
定價金參拾錢
郵税金四錢

十返舎一九著
栗毛
定價金廿五錢
郵税金四錢

浮世の如き美人喜美子
どうせ浮世は儘ならぬ
浮世の如き美人喜美子
どうせ浮世は儘ならぬ
浮世の如き美人喜美子
どうせ浮世は儘ならぬ

大平野虹著
二宮尊徳
定價金參拾錢
郵税金四錢

規子著
規子著
定價金參拾錢
郵税金四錢

神田伯山著
石童丸
定價金參拾錢
郵税金四錢

鬼王龍城著
富野會我兄弟
定價金參拾錢
郵税金四錢

高橋筑峰譯
少年日本外史
定價金參拾錢
郵税金四錢

曲亭馬琴著
椿説弓張月
定價金參拾錢
郵税金四錢

花の如き美人喜美子
境の如き美人喜美子
境の如き美人喜美子
境の如き美人喜美子
境の如き美人喜美子
境の如き美人喜美子

高橋筑峰譯
少年日本外史
定價金參拾錢
郵税金四錢

曲亭馬琴著
椿説弓張月
定價金參拾錢
郵税金四錢

神田伯山著
石童丸
定價金參拾錢
郵税金四錢

鬼王龍城著
富野會我兄弟
定價金參拾錢
郵税金四錢

大平野虹著
二宮尊徳
定價金參拾錢
郵税金四錢

規子著
規子著
定價金參拾錢
郵税金四錢

少年日本外史
少年日本外史
少年日本外史
少年日本外史
少年日本外史
少年日本外史

椿説弓張月
椿説弓張月
椿説弓張月
椿説弓張月
椿説弓張月
椿説弓張月

石童丸
石童丸
石童丸
石童丸
石童丸
石童丸

富野會我兄弟
富野會我兄弟
富野會我兄弟
富野會我兄弟
富野會我兄弟
富野會我兄弟

二宮尊徳
二宮尊徳
二宮尊徳
二宮尊徳
二宮尊徳
二宮尊徳

規子著
規子著
規子著
規子著
規子著
規子著

少年日本外史
少年日本外史
少年日本外史
少年日本外史
少年日本外史
少年日本外史

椿説弓張月
椿説弓張月
椿説弓張月
椿説弓張月
椿説弓張月
椿説弓張月

石童丸
石童丸
石童丸
石童丸
石童丸
石童丸

富野會我兄弟
富野會我兄弟
富野會我兄弟
富野會我兄弟
富野會我兄弟
富野會我兄弟

二宮尊徳
二宮尊徳
二宮尊徳
二宮尊徳
二宮尊徳
二宮尊徳

規子著
規子著
規子著
規子著
規子著
規子著

少年日本外史
少年日本外史
少年日本外史
少年日本外史
少年日本外史
少年日本外史

椿説弓張月
椿説弓張月
椿説弓張月
椿説弓張月
椿説弓張月
椿説弓張月

石童丸
石童丸
石童丸
石童丸
石童丸
石童丸

富野會我兄弟
富野會我兄弟
富野會我兄弟
富野會我兄弟
富野會我兄弟
富野會我兄弟

二宮尊徳
二宮尊徳
二宮尊徳
二宮尊徳
二宮尊徳
二宮尊徳

規子著
規子著
規子著
規子著
規子著
規子著

巖生譯
アラビヤ物語
定價金參拾錢
郵税金四錢

アラビヤ物語は世界の
誇る名作であり、その
内容の豊富さと表現の
美しさに、古今東西に
愛読されてきた。本書は
その魅力を伝えるために、
巖生先生による生訳を
収録している。読むと、
異国情緒が溢れ、心は
自然とアラビヤの大地
へと旅する。必読の書。

大平野虹著
模範日記文
定價金參拾錢
郵税金四錢

本書は、古今東西の
日記の精華を集めた
模範日記文である。各
項目に、具体的な書き
方を示し、読者はその
スタイルを真似て、自
己の日記を書くことが
できる。内容は、日常
生活の点点滴滴から、
大それた出来事まで、
幅広くカバーしている。
初心者から上級者まで
、誰でも楽しめる。一
冊あれば、日記を書く
際の迷いがなくなる。

翠揚子著
新書翰
定價金參拾錢
郵税金四錢

自己の意思を他人に
伝えるには、適切な文
字の選択が不可欠であ
る。本書は、現代社会
で求められる「新書翰」
の書き方を詳しく解説
している。ビジネスの
場面から、友人との交
渉まで、様々なシチュ
エーションに対応する文
字の使い方を学べる。読
者は、本書を通じて、
自分の言葉が相手に正
しく伝わるようになる。

大平野虹著
新編書翰文
定價金參拾錢
郵税金四錢

本書は、書翰の歴史と
その変遷を詳しく解説
している。古代の書翰
から、近現代の書翰ま
で、そのスタイルの変
化を追跡している。各
時代の書翰の特色を、
具体的な例文を挙げて
説明している。読者は、
本書を通じて、書翰の
文化を深く理解するこ
とができる。また、書
翰の書き方を学ぶこと
もできる。一冊あれば、
書翰の魅力を堪能する
ことができる。

翠揚山人著
美的候文
定價金參拾錢
郵税金四錢

美的候文とは、文章の
リズムと調子を整え、
読者の心に響かせるこ
とを指す。本書は、美
的な文章の書き方を、
具体的な例文を挙げて
解説している。読者は、
本書を通じて、文章の
美しさを追求すること
ができる。また、美的
候文の書き方を学ぶこ
とができる。一冊あれば、
文章の魅力を高めるこ
とができる。

小林鶯里著
美文大観
定價金參拾錢
郵税金四錢

美文大観とは、古今
東西の美文を集めた
大観である。各項目に、
具体的な美文を挙げて
紹介している。読者は、
本書を通じて、美文の
魅力を堪能すること
ができる。また、美文
の書き方を学ぶことも
できる。一冊あれば、
美文の魅力を堪能する
ことができる。

翠揚子著
新式記事文
定價金參拾錢
郵税金四錢

記事文とは、事実を
正確に伝えるための文
字である。本書は、新
式記事文の書き方を、
具体的な例文を挙げて
解説している。読者は、
本書を通じて、記事文
の書き方を学ぶことが
できる。また、記事文
の魅力を高めることも
できる。一冊あれば、
記事文の魅力を高める
ことができる。

大平野虹著
新式はがき文
定價金參拾錢
郵税金四錢

はがき文とは、簡潔
でわかりやすい文章
である。本書は、新式
はがき文の書き方を、
具体的な例文を挙げて
解説している。読者は、
本書を通じて、はがき
文の書き方を学ぶこと
ができる。また、はが
き文の魅力を高めるこ
とができる。一冊あれば、
はがき文の魅力を高め
ることができる。

島田學堂著
座右訓
定價金參拾錢
郵税金四錢

座右訓とは、座敷の
作法を詳しく解説した
書である。本書は、座
敷の作法を、具体的な
例文を挙げて解説して
いる。読者は、本書
を通じて、座敷の作法
を学ぶことができる。ま
た、座敷の魅力を高め
ることができる。一冊
あれば、座敷の魅力を
高めることができる。

山岡麟齋著
朗吟詩集
定價金參拾錢
郵税金四錢

朗吟詩集とは、朗吟
詩を集めた書である。
本書は、朗吟詩の書
き方を、具体的な例文
を挙げて解説している。
読者は、本書を通じ
て、朗吟詩の書き方を
学ぶことができる。ま
た、朗吟詩の魅力を高
めることもできる。一
冊あれば、朗吟詩の美
しさを堪能することが
できる。

斬馬秋水著
天下劍舞術極意
定價金參拾錢
郵税金四錢

天下劍舞術極意とは、
剣舞の極意を詳しく
解説した書である。本
書は、剣舞の書き方
を、具体的な例文を挙
げて解説している。読
者は、本書を通じて、
剣舞の書き方を学ぶこ
とができる。また、剣
舞の魅力を高めること
ができる。一冊あれば、
剣舞の魅力を高めるこ
とができる。

佐々木高明著
孔子聖訓百話
定價金參拾錢
郵税金四錢

孔子聖訓百話とは、
孔子の聖訓を100話
にまとめた書である。
本書は、孔子の聖訓
を、具体的な例文を挙
げて解説している。読
者は、本書を通じて、
孔子の聖訓を学ぶこ
とができる。また、孔
子の聖訓の魅力を高め
ることができる。一冊
あれば、孔子の聖訓の
魅力を高めることが
できる。

望月紫峰著
國事犯
定價 金五十錢
郵税 金六錢

義を重んじ命を擧げずる
激し勇に血を流す
天に呼ぶ狂走の等
基礎固め法に
擾亂の暴漢を
狂児の徑路を
至つた盛夏を
顧みれば

花散里著
金波銀波
定價 金四十五錢
郵税 金六錢

断片海岸に
顔子に片月
才女に情を
果敢に身を
ぶつて風を
ぶつて風を
切つて風を
袖切つて風を

春野柳村著
終編なさぬ仲
定價 金五十錢
郵税 金六錢

社會と奮闘して
夫と奮闘して
家と奮闘して
子と奮闘して
悪姑の毒を
好意の毒を

小山集川著
小なさぬ仲
定價 金五十錢
郵税 金六錢

悲愴な奇なる運命
容顏は如き志強
門の如き執
念の如き執
如き執
燃如の如き執

小山集川著
戀の迷ひ
定價 金五十錢
郵税 金六錢

秘密の恋に
春の如き
誘ふ如き
欺く如き
大人の新作
多情の才情

高橋筑峰著
悲義血俠骨
定價 金四十錢
郵税 金六錢

美人の爲め身を犠牲
漢の流す血を
骨髄の如き
つらき如き
解決の如き

島田孤村著
妖婦短冊お留
定價 金四十錢
郵税 金六錢

互に破れぬ
ば降る想合
なよまれば
み足る外
の底地獄
が幸の怪胸

北島春石著
女の一生涯
定價 金五十錢
郵税 金六錢

才高絶世の美人
生れなげく
提げられた
海に沈み
萬丈の深淵
腰の女を

花散里著
誰が子
定價 金五十錢
郵税 金六錢

汚れた手
人のたて
評のたて
百鬼夜行
代の傑作

小澤翠月著
新作喜劇集
定價 金五十錢
郵税 金六錢

浮世の茶
沸くお茶
劇界の風
樂作の脚
技の楽作

林翠浪著
會我廼家劇十八番
定價 金三十五錢
郵税 金六錢

喜劇の傑作
して来り
投五郎の
足踏の要
へ願の要

河野紫光著
活動寫眞喜集
定價 金四十五錢
郵税 金六錢

徒らに外
を寄るに
本能の活
ふ類多し
著作の多

容 内

210 狩男説小
「アハ、ハ、」その後姿を見送つた笹沼は陰気な笑ひを洩らしつゝ、
のつそりと床几を離れた。「おばアや妙なこともあるもんだの、人の物
を盗るのも商賣なら、その盗つた人間を又捕つて飯食の種にするのも
商賣、いや世渡りはさま／＼ちや（以下畧す）」

弱き女も時に六尺漢子を足下に習伏せしむる事あり辛辣の怪腕

源流社會暗
か 泉

説小 男 狩

定價金五十錢
裝訂 優美
郵税金六錢

を弄せる本書の主人公の眼中英雄も豪傑もなき真に痛快の小説

容 内

338 狩男説小
跡に残つた神田少校は壁の顔れ目へ古新聞をびた／＼と貼りつけて隣
から覗かれぬやうに防禦の心配をしたそれから戸をがたびしさせて外
の露路口で大きな咳拂ひその儘歸つてゆくやうな氣配を見せてから竊
と取つて返して扱足しつゝ家へ入つた（以下畧す）

容 内

91 波銀波金
「其心配は爲さらんでも宜い何有、精一は私の舎弟だ、兄として舎弟
の所分ぐらゐが能んで何うなるものか
「然うなされるに致してもですよ、今後も一つ邸にお置きなされるは策
の得たるものでござせん

人生の儂なきわけて戀に捉はれた才子佳人の切なる眞情を遺憾なく發揮し我

東京毎
日新聞
懸賞一
等當選

説小 金 波 銀 波

定價金四十五錢
美本 優粹
郵税金六錢

望の前にはうたかたの薄屑と消ゆるまでの堅き決心は眞に同情の涙あつまる

容 内

245 波銀波金
天には牙けき月の影一望三十六里の風光繪のやうな相模灘は夜目には
それぞと見分け得ぬが腰越小動は其方と覺しき方は薄墨の一刷毛に彩
られて海には千鳥の啼音がする
八重子は悄然と佇んだまゝ……………

容 内

132 みがし
其晩、文江は一人電燈の下に懐ろに納めて置いた良人からの手紙を
擴げて讀んだ細い文字で纏綿として切ない愛情を繰返した文で樂しか
るべき二人の前途とを良人の口から聞くやうに綴られてある、文江は
宛がら良人の體を手に抱くやうに (以下畧す)

血あり
涙あり
人あり
めは讀

小説
志がらみ

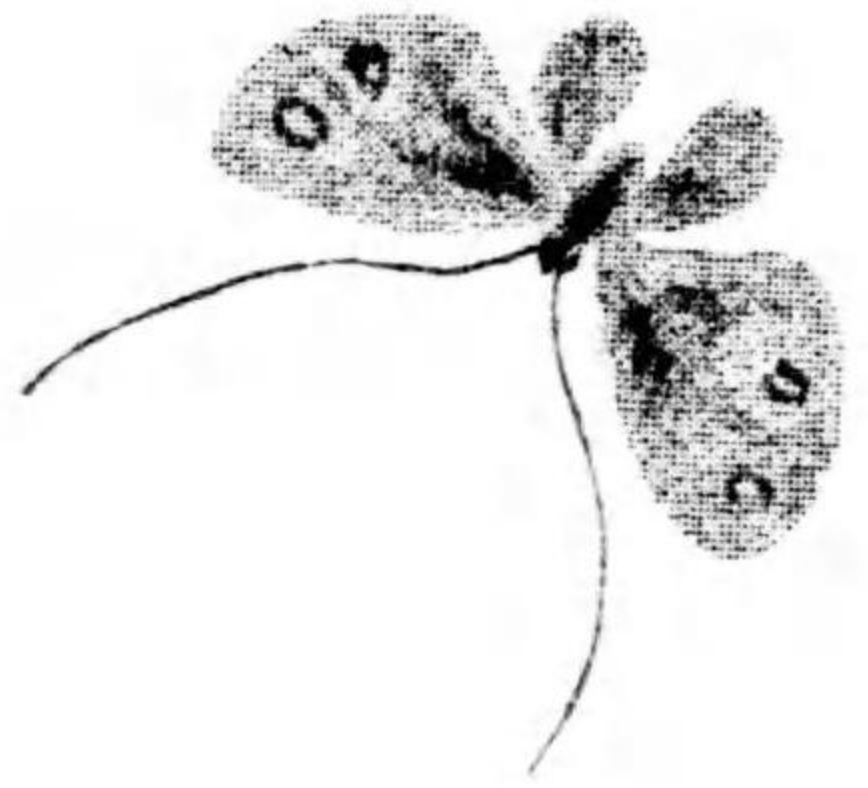
定價金五十錢
頗美本
郵税金六錢

燃たつ炎とばかりに熱しに熱した青春男女の血汐は終に一塊の
死灰の如く冷めたき浮世の風に吹さいなまる、好個の家庭的小説

容 内

136 みがし
先方に何んな口實があらうとも、必ず我妻に貫はねば置かぬ意りの
七郎も文江と先の良人とは死んでも二人の手は放さぬ約束があると聞
かされては全身に漲りたつた勇氣も急所を突き抜かれたやうな苦痛と
失望を…… (以下畧す)

298
96



終

